

# 日本語教師発話の分析

## －初級と中・上級レベル授業、そして母語話者同士の会話を比較して－

### Analysis of Japanese Teachers' Utterances -Comparing Beginner and Intermediate / Advance Level Classes, and Conversations Between Native Speakers-

藤田裕一郎・立部文崇

#### 要旨

本研究の目的は、日本語教師の発話の特徴を量的な側面から明らかにすること、そして日本語母語話者同士の会話も含めて比較、検討し、日本語教師の授業内の発話において、どのような言語調整が行われているか明らかにすることである。調査には『日本語教師発話コーパス』と『BTSJ 日本語自然会話コーパス』を使用し、初級レベル、中・上級レベル、母語話者同士の雑談の会話、母語話者同士の論文指導時の教師の発話を比較、検討した。その結果、1) 本調査でも、日本語教師による授業内の発話において言語調整が行われていること、2) 教師は初級レベルの授業では中・上級レベルに比べ、より一層の言語調整を行っていること、3) 初級での教師の発話は母語話者同士の雑談よりも易しいこと、4) 中・上級での教師の発話は母語話者同士の雑談に近いものであること、5) 母語話者同士の論文指導時の発話は中・上級での教師の発話よりも難しいことが分かった。

キーワード： コーパス ティーチャー・トーク 言語調整 日本語教師

## 1. はじめに

社会的ニーズの高まりから日本語教師の国家資格化が広く検討されている昨今、日本語教師の専門性を明らかにすることは、社会に向けて日本語教育の意義を発信、説明するうえで重要な課題の1つであると考えられる。

直接法による日本語の授業では、日本語教師は日本語学習者（以下、学習者）に対して学習者のレベルに応じて言語調整を行うティーチャー・トークを用いるとされる。ティーチャー・トークは、語彙や構文を学習者のレベルに合わせたものにするなどの特徴を持つことから（岡崎・長友, 1991）、日本語母語話者の自然な発話とはやや異なる側面を持つとされる。先行研究において、ティーチャー・トークがどのような特徴を持つのかについてはおおよそ述べられているものの、それらを量的に検証したものは少なく、日本語母語話者同士の会話と量的な面での比較したものについては管見のかぎりない。そこで、『日本語教師発話コーパス』（立部・藤田, 2015）と『BTSJ 日本語自然会話コーパス』（宇佐美, 2018）を使い、初級レベルと中・上級レベルの授業における日本語教師の発話、そして日本語母語者同士の雑談、日本語母語者同士の論文指導時の教師の発話を比較し、ティーチャー・トークの特徴を実証的に明らかにすることを目的とした。

## 2. 先行研究と本研究の目的

Chaudron (1988) は、第二言語教育が行われている様々な教室の研究から、第二言語教育における教師は表1のような言語調整を行うとしている。

表1 ティーチャー・トークの特徴 (Chaudron, 1988)

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"><li>1) ゆっくり話す。</li><li>2) ポーズを頻繁に、かつ長くとる。</li><li>3) 発音を強調したり単純化したりする。</li><li>4) 基本的な語彙を用いる。</li><li>5) 従属節を少なくする。</li><li>6) 疑問文より平叙文を多く用いる。</li><li>7) 自身の発話を繰り返す。</li></ol> |
|---|

上記のような特徴を持つティーチャー・トークが用いられる基本的な目的は、このような言語調整によって目標言語能力が不十分な学習者の言語理解を促すことだと考えられる。ティーチャー・トークに関する研究には、Chaudron (1988) をはじめ、その特徴をまとめたもの（岡崎・長友, 1991）、教師がティーチャー・トークを用いる際の留意点を指摘したもの（片岡, 2000）、教師の自己研修の可能性を探るもの（山本, 1994）、日本語教師養成講座の教育実習の教案を分析したもの（佐々木・宮本, 2003）などがある。しかし実際の教師発話を基にした先行研究は坊菌 (2009) や藤田・立部 (2020) などに一部見られるものの、数は少ない。この中の坊菌 (2009) は、初級レベルから上級レベルまでの10の授業を対象に、導入の仕方、媒介語の使用、発話の速度、調整の仕方（発話コントロール）について分析している。そして、教師の言語調整の仕方について、初級レベルでは、繰り返しによる調整が多く用いられていたこと、全体的に発話

の区切りが短くなっていたことなどを報告している。しかし、坊菌（2009）自身も述べているように、分析対象となったデータは各レベルそれぞれ2つから5つに留まっており、量的な分析としては十分だとは言えない。そのため、坊菌（2009）が報告しているこれらの特徴がティーチャー・トークの特徴として一般的に認められるものなのかについては疑問が残る。また、これらティーチャー・トークにおける言語調整を量的に分析する際、ティーチャー・トーク同士を比較しただけでは相対的なティーチャー・トーク比較に留まり、自然な日本語と何が異なるのかは分からない。そのため、日本語母語話者同士の会話と比較することも必要だろう。

そこで、本研究では、ティーチャー・トークの特徴を量的な側面から明らかにすること、そして日本語母語話者同士の会話も含めて比較し、どのような言語調整が行われているか明らかにすることを目的とした。

### 3. 調査

日本語教師の発話と母語話者同士の発話を分析するため、『日本語教師発話コーパス』と『BTSJ 日本語自然会話コーパス』を使用した。『日本語教師発話コーパス』には、初級レベル約43時間分（45授業）、中級レベル約23時間分、上級レベル約3時間分（26授業）<sup>1</sup>の教師と学習者の授業内会話が収録されている。まず、それぞれの授業に含まれる学習者の発話を取り除き、分析対象データとした。次に、[笑い]、[教師が板書する]などの文脈情報、[学習者1]などの個人情報などを記述した箇所、記号などを削除し、教師の発話部分だけを残した。一方、『BTSJ 日本語自然会話コーパス』には、年齢、性別、話題などが異なる333の会話データが収録されている。本調査ではこの中の親しい同性友人同士の会話19例と論文指導時の教師と学生の面談における教師の発話10例を分析の対象とした。これは、日常的な話題について平易な語彙・表現で話すことが予想される雑談と、それとは対照的に、具体的、抽象的な話題について難解な語彙や表現を使って話すことが予想される論文指導時の発話を比較対象にすることで初級と中・上級の日本語教師の発話にどのような言語調整が行われているかを比較できると考えたからである。なお、『BTSJ 日本語自然会話コーパス』における調査対象データも『日本語教師発話コーパス』のデータと同様に、学生の発話、文脈情報や個人情報を記述した箇所、記号などを削除したうえで、分析対象データとした。

### 4. 結果

分析には日本語文章難易度判定システム jReadability<sup>2</sup>（以下、jReadability）を使い、授業・会話データごとにリーダビリティ・スコア、形態素数（異／延）、一文の平均語数、語彙構成レベルを算出した。これらはそれぞれ、文章の難易度、語彙の使用範囲、一文の長さ、使用語彙の難易度であり、これらを総合的に分析することで、日本語教師の言語調整の全体像が見えると考えられる。リーダビリティ・スコアは文章の難易度を示す値で、数値が大きい場合、相対的に易しいテキストで、数値が小さい場合は、相対的に難しいテキストであるとされる。入力された文を形態素解析し、文の平均的な長さ、動詞や助詞の含有率を文章単位で計算する。そしてリーダビリティ公式の係数を当てはめ、最適なリーダビリティレベルが算出される（李, 2018）。語彙の使用範囲は総形態素数中に異なり形態素がどれだけあるか、すなわち延べ形態素数である総形態素数（延）で異なり形態素数である総形態素数（異）を割り算することで算

出した。算出された値は1に近づくほど異なり度が高く、したがって語彙の使用範囲が広いと考えられる<sup>3</sup>。一文の平均語数はjReadabilityが算出した値をそのまま示した(表2)。

表2 授業データ

	授業・会話数	収録時間	リーダビリティ・スコア	形態素数 (異/延)	一文の 平均語数
初級	43	60.65分 (20.95)	6.11 (0.37)	0.090 (0.02)	8.33 (1.15)
中・上級	26	52.35分 (17.48)	5.46 (0.25)	0.120 (0.0.3)	10.22 (1.58)
雑談	19	23.39分 (2.35)	6.15 (0.25)	0.121 (0.01)	10.57 (1.26)
論文	10	31.10分 (14.11)	4.45 (0.77)	0.150 (0.04)	25.27 (7.54)

初級、中・上級はそれぞれ初級、中・上級の学習者に対する教師の授業内発話を示す。雑談、論文はそれぞれ親しい同性同士の母語話者の雑談、論文指導時の教師の発話を示す。授業・会話数はデータの数で、それ以外は平均値、( )内の数値はSDを表している。なお、本稿では、これ以下の結果の記述、考察においてもそれぞれ、初級(初級レベルの学習者を対象とした日本語教師の発話)、中・上級(中級・上級レベルの学習者を対象とした日本語教師の発話)、雑談(同性同士の母語話者による雑談)、論文(論文指導時の教師と学生の面談場面の会話)と表記する。

授業・会話における文章の難易度(リーダビリティ・スコア)を分析するために分散分析を行った。Welchの修正分散分析より、5%水準で有意差が見られ( $F(3, 30.904) = 45.983, p < .01, \eta^2 = 0.66$ )、授業・会話の違いにより文章の難易度に差があることが分かった。そこで、Tukey HSD法により多重比較を行ったところ、論文と中・上級( $p < .01$ )、中・上級と雑談( $p < .01$ )及び初級( $p < .01$ )の間に有意差が見られた。

同様に授業・会話における語彙の使用範囲を分析するために分散分析を行った。Welchの修正分散分析より、5%水準で有意差が見られ( $F(3, 31.036) = 23.469, p < .01, \eta^2 = 0.39$ )、授業・会話の違いにより語彙の使用範囲に差があることが分かった。そこで、Tukey HSD法により多重比較を行ったところ、論文と雑談( $p = .05$ )及び中・上級( $p = .02$ )、雑談及び中・上級と初級(ともに $p < .01$ )の間に有意差が見られた。

同様に授業・会話における一文の平均語数を分析するために分散分析を行った。Welchの修正分散分析より、5%水準で有意差が見られ( $F(3, 28.611) = 32.953, p < .01, \eta^2 = 0.78$ )、授業・会話の違いにより一文の平均語数に差があることが分かった。そこで、Tukey HSD法により多重比較を行ったところ、論文と雑談( $p < .01$ )及び中・上級( $p < .01$ )、雑談及び中・上級と初級( $p = .01, p = .03$ )の間に有意差が見られた。

これらの結果をまとめると、表3のようになる。

表3 結果のまとめ

項目	結果
文章の難易度 (難>易)	論文 > 中・上級 > 雑談 = 初級
語彙の使用範囲 (広>狭)	論文 > 雑談 = 中・上級 > 初級
一文の平均語数 (多>少)	論文 > 中・上級 = 雑談 > 初級

文章の難易度、語彙の使用範囲、一文の平均語数のいずれにおいても論文での発話が最も難しく、一方初級での発話が最も易しいことが分かった。雑談と中・上級に関しては、文章の難易度は中・上級のほうが雑談より難しいと考えられる一方で、語彙の使用範囲と一文の平均語数には差がないことが分かった。

授業・会話ごとに使われている語彙のレベルを見るために、jReadability によって算出された語彙レベル構成割合<sup>4</sup>を図1～4に示した（実数値は参考資料1を参照）。

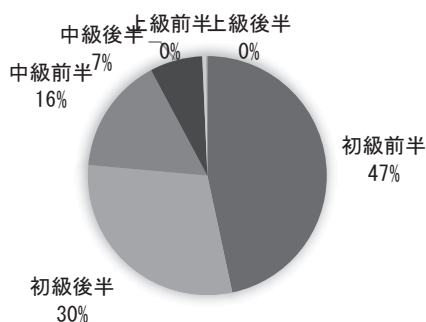


図1 初級の語彙レベル構成

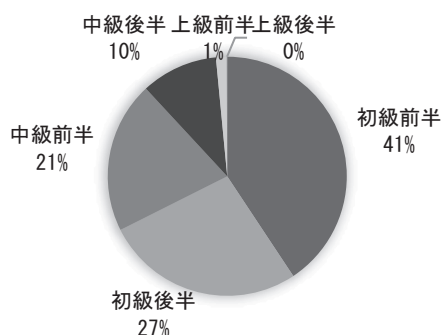


図2 中・上級の語彙レベル構成

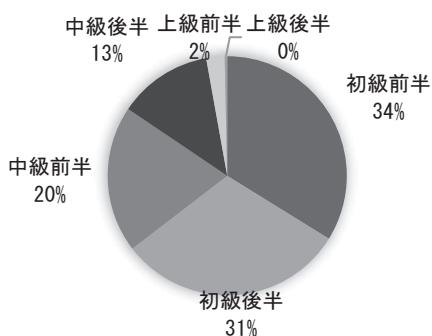


図3 雑談の語彙レベル構成

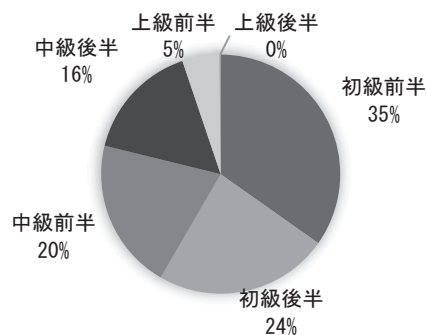


図4 論文の語彙レベル構成

図1～4を見ると、左上図の初級は初級前半と初級後半で75%以上を占め、初級後半レベルまでの語彙が中心であることが窺える。右上図の中・上級と左下図の雑談についても同様の傾

向が見られるが、初級前半の語彙の使用割合は若干減り、中級前半や中級後半の語彙の使用が15%程度見られる。右下図の論文に関しては、初級前半の語彙の割合が最も多いものの、初級前半の語彙の使用が主とは言えず、どちらかと言えば、初級前半、初級後半、中級前半、中級後半レベルの語彙がバランスよく使われているように見える。

## 5. 考察

本稿では、ティーチャー・トークの特徴を量的な側面から改めて検討すること、そして日本語母語話者同士の会話と比較し、どのような言語調整が行われているのか明らかにすることを目的に、初級と中・上級の教師の発話、雑談時と論文指導時の母語話者同士の会話を対象に文章の難易度、語彙の使用範囲、一文の長さ、使用語彙の難易度（割合）を調べた。その結果、全体としては、論文指導での発話が最も難しく、初級の発話が最も易しいこと。雑談と中・上級に関しては、文章の難易度は中・上級のほうが雑談より難しい一方で、語彙の使用範囲と一文の平均語数には差がないことが分かった。

まず、ティーチャー・トークの特徴を量的な側面から検討するために、初級と中・上級の発話の比較を取り上げると、結果は以下のようにまとめられる。

- |                  |      |   |    |
|------------------|------|---|----|
| 1) 文章の難易度 (難>易)  | 中・上級 | > | 初級 |
| 2) 語彙の使用範囲 (広>狭) | 中・上級 | > | 初級 |
| 3) 一文の長さ (長>短)   | 中・上級 | > | 初級 |
| 4) 語彙構成レベル (難>易) | 中・上級 | > | 初級 |

坊菌 (2009) は初級レベルの授業における教師の発話には文を短く区切るという特徴があると述べている。本調査における一文の長さについても3)のようにこれを支持した。これは Chaudron (1988) が挙げている従属節を少なくするという特徴にも当てはまり、初級レベルの授業では複雑な文構造を用いず、平易な構造の文で授業を行うという言語調整がなされていることが示唆された。また、2)の中・上級のほうが語彙の使用範囲が広いこと、そして4)の中・上級のほうが難易度が高い語彙を使用する割合が高いことから、初級のほうが言語調整の度合いが強いことが示唆された。岡崎・長友 (1991) は、ティーチャー・トークの特徴の1つとして語彙や構文を学習者に合った適切なものにする<sup>1)</sup>と述べており、教師は中・上級の学習者に比べて熟達度が低い初級の学習者に合わせて、意図的に語彙の使用範囲を狭めたり、易しい語彙を選んで使用していると考えられた。これは Chaudron (1988) が挙げている基本的な語彙を用いるという特徴にも当てはまる。

語彙の使用範囲の狭さについて、坊菌 (2009) や Chaudron (1988) は自身の発話を繰り返すことをティーチャー・トークの特徴の1つに挙げており、教師は一度では聞き取れない、または理解できない初級レベル学習者のために、同じことばを繰り返すというストラテジーを用いていると考えられる。本調査においても、『日本語教師発話コーパス』を見てみると、5)のように同じことばを繰り返している教師の発話が散見された。

- 5) T: あーいいですねー。いいですねー。はい。はい。ね、行きませんかー。勉強、一緒にしま

せんかー。はい、いいですよー。はい、いいですよーはいしましよー。

(下線、筆者) (授業 ID : 11、発言 ID : 5197)

このような繰り返しは異なり形態素数は増えない一方で、延べ形態素数だけが増えることになり、初級のほうが語彙の使用範囲が狭くなった可能性が考えられる。また初級レベル学習者のほうが知っている語彙の幅が狭いため、教師はそれに合わせ、身近で狭い範囲の話題を扱う可能性があり、話題自体の幅が狭いため、その中で使用される語彙の幅も自ずと狭くなる可能性も考えられた。そして、これらの結果から量的な本調査においても、ティーチャー・トークにおける言語調整が確認された。

次に、日本語母語話者同士の会話との比較について検討したい。ティーチャー・トークと母語話者同士の会話の比較結果は以下のようにまとめられる。

- |                  |                                     |
|------------------|-------------------------------------|
| 6) 文章の難易度 (難>易)  | 論文指導 > 中・上級 > 雑談 = 初級               |
| 7) 語彙の使用範囲 (広>狭) | 論文指導 > 雑談 = 中・上級 > 初級               |
| 8) 一文の長さ (長>短)   | 論文指導 > 中・上級 = 雑談 > 初級               |
| 9) 語彙構成レベル (難>易) | 論文指導 > 中・上級 ≒ 雑談 > 初級 <sup>5)</sup> |

いずれにおいても論文指導の発話が最も難しいことについて、その目的から説明口調で文が長い、研究内容について込み入った話をする、専門用語を使うといった点で難しいのではないかと考えられる。『BTSJ 日本語自然会話コーパス』を見ると、次のような例がある。

- 10) T: ん、ん、それは、あの、主題化と受身とは全く違うと思うんですけども、主題化というのは、あの、そういう視点の移動ではなくて、主題化というのは、あのー、ま、主題化自体がそれは1つの文法現象として考えられるので。(下線、筆者)

(会話の通し番号 : 045-03、発話文番号 : 30)

この例は日本語の文法現象について話している場面であり、「文法現象」や「主題化」、「視点の移動」など言語で言語を説明するメタ言語的な語彙を使用する場面で、研究内容について専門用語を使いながら込み入った話をしている様子が窺える。もちろん、中・上級の授業でも、次のように日本語の文法について文法用語を使って説明する発話は見られる。

- 11) T: (省略) N1に即したN2。このN2を修飾するかたち、の場合は、N1、に即した、というかたちになります。はい、そして、さっきも言いましたが、名詞には、事実とか規則を表す名詞がくる。よく使われる言葉をいくつか例を書きました。四つ、この下のところね。じゃ、読んでもらいましょう。(省略) (下線、筆者)

(授業 ID : 67、発言 ID : 49038)

しかし、この例にある「修飾」、「事実」、「規則」などは「修飾」を除き、日常的な会話の中でも使われる語彙であり、「文法現象」や「主題化」、「視点の移動」といった言語の話題や専門

的な話以外ではあまり使われないと考えられる語彙とはやや難易度が異なる可能性がある。また、語彙の使用範囲についても、専門性が高まるとともに指し示す事象の僅かな相違や微妙なニュアンスの違いも的確に使い分ける必要があるだろう。そのため、より専門性が高い論文指導における語彙の使用範囲が広がったのではないかと思われる。

中・上級と雑談の比較については、文章の難易度については中・上級のほうが雑談より難しいものの、その他は変わらないという結果になった。文の長さや語彙の使用範囲、語彙構成レベルに違いはなく、文章の難易度のみ中・上級のほうが難しいということは、同程度の長さの文、同程度の語彙の異なり形態素率、難易度でありながら、文構造のみ中・上級のほうが難しいということになる。

12) は上級クラスでの教師の発話である。

12) T: うん, A と B で考えるね。前にきているのは, 前にきているのが A。で, 後ろが B。B を強調したいときに使う文法。だから, B が正解。うん, そう。治療も大事, なんだけど, それよりも, 予防が大事, といっているね。治療もさることながら。治療も大事なんだけど, それよりも, 予防に努力すべきだ。はい, では, この教科書の例文, 1, 2, 3 を, リポートします。じゃー, 読みますからリポートしてください。少子化の原因は晩婚化もさることながら, 教育費の負担の大きさにもある。(下線、筆者)

(授業 ID : 66、発言 ID : 48886)

データを目視しただけでは明確なことは分からないが、長い名詞修飾や複文はあまり見られない一方で、「～もさることながら」のような機能文法が目立った。そのため、文構造などにより文章が難しいというよりは、機能文法によって難しいと判断されたのではないかと考えられる。

一方、雑談と初級の比較では文章の難易度は変わらないが、それ以外は初級のほうが易しいという結果になった。雑談のほうが語彙の使用範囲が広く、語彙構成レベルも難しく、そして一文の長さは長い一方で、文章の難易度は変わらないということは、雑談は初級に比べ、語彙は難しく、使用する語彙量も多いが、文構造は極めて平易ということになる。

13) は母語話者同士の雑談の発話である。

13) A: でも、たいていさ、なんか、もう、混んでる時はー(うん)、じゅ、5分か10分に1回ぐらい(うん)、呼び出されるからー、クレーム対応とかさー。

B: クレームとか言って。

A: クレームとかさ、あとは、そういう電話かかってきたりー、なんだろ、梱包機が壊れたりしたら修理しなきゃなんないしー、絶対もう<なんか>。

A: <ねー>、ってどのぐらい古いの？

B: <あたしー>。

A: <もう、す>っごい、一番お局？

B: ではないよ。(下線、筆者)(会話の通し番号: 017-01、発話文番号: 245-251)



これは、一般的には平易と考えられるアルバイトの話題であるが、「クレーム対応」、「梱包機」、「お局」など学習者からすれば難しい語彙が使われている。また、話題については、アルバイトのほかに高校時代の委員の話題や焼酎の話、趣味のライブ、受験、恋愛、車の修理、教育実習など幅広く、話題の幅広さが使用語彙の難しさや語彙の使用範囲の広さにつながっている可能性がある。

ここまでの全体を整理すると、中・上級の発話は母語話者同士の雑談と同等かそれよりもやや難しい程度であること。また、初級の発話は母語話者同士の雑談よりも易しく、全体として教師は学習者の日本語の熟達に合わせて、言語調整を行っていることが分かった。

## 6. まとめと今後の課題

本稿では、ティーチャー・トークの特徴を量的な調査により明らかにすること、そして日本語母語話者同士の会話と比較し、どのような言語調整をしているのか明らかにすることを目的に『日本語教師発話コーパス』、『BTSJ 日本語自然会話コーパス』を使用して、教師の発話と母語話者同士の発話を比較、検討した。その結果、1) 量的な調査を行った本調査においても、ティーチャー・トークによる言語調整が行われていることが確認されると同時に、2) 教師は初級レベルの授業において、中・上級レベルより一層言語調整を行っていることが分かった。また、ティーチャー・トークと母語話者同士の会話と比較することで、3) 初級での教師の発話は母語話者同士の雑談よりも易しいこと。4) 中・上級での教師の発話はおおむね母語話者同士の雑談程度の難易度であること。5) 母語話者同士の論文指導時の発話は中・上級での教師の発話よりも難しいことが分かった。

他方、今回のテキストデータによる調査では Chaudron (1988) が挙げているポーズの回数や長さ、発話のスピード、発音の明確化などについては分析できなかった。

今後、これらの課題に取り組むことにより、日本語教師の専門性がどのような点にあるのかを明らかにすることも必要であろう。

## 注

- 1 「日本語教師発話コーパス」では、初級レベル、中級レベル、上級レベルの区分けは授業内で用いられた主要テキストによって判断されている。例えば、『みんなの日本語初級 I・II』を主要テキストとして用いている授業の場合は、初級レベルの授業として判断されている。
- 2 本研究では、日本語文章難易度判別システムを使用した。jReadability は、本来ティーチャー・トークのような話しことばを分析するシステムではないが、本調査で分析する項目は書きことばにも話しことばにも共通する項目で、本システムで分析しても問題ないと思われること。この分析をするにあたって他に適当な分析ツールが見当たらないことから、本システムを使って分析することにした。
- 3 語彙の使用範囲をこのように算出したのは、各データの収録時間が異なっており、絶対的な発話量の多さ（または少なさ）によって、使用する形態素の数が多く（または少なく）算出されるということ为避免、発話量に左右されない一定の数値を算出しようとしたためである。

- 4 語彙のレベル判断は jReadability が行ったもので、jReadability の作成者が独自に開発した語彙表に基づいている。
- 5 語彙構成レベルの難易度は統計分析による判断ではなく、グラフを目視することによって判断した。初級は初級前半と初級後半の語彙の割合が4分の3を占めるため、他よりも易しいと判断した。論文はいずれのレベルの語彙も圧倒的多いということではなく、どちらかと言えば初級前半、初級後半、中級前半、中級後半の語彙がバランスよく使用されていることから、他よりも難しいと判断した。中・上級と雑談は多少の割合の差はあれ、似た傾向の割合であることから、ほぼ同じと判断した。

## 参考文献

Chaudron, Craig. (1988) "Second language classrooms: research on teaching and learning." Cambridge University Press.

李在鎬 (2018) 「日本語教育のための文章難易度に関する研究」『早稲田日本語教育学』, 21, pp.1-16.

宇佐美まゆみ監修 (2018) 『BTSJ 日本語自然会話コーパス (トランスクリプト・音声) 2018 年版』、国立国語研究所、機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」、サブ・プロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」(リーダー: 宇佐美まゆみ, <https://ninjal-usamilab.info/corpus2020/>)

岡崎敏雄・長友和彦 (1991) 「日本語教育におけるティーチャー・トークの質的向上に向けて」『広島大学教育学部紀要』 2, 39, pp.241-8.

片岡朋子 (2000) 「日本語教師の授業における『話し方』について—適切な日本語のコントロールの要因—」『東京家政学院大学紀要』, 40, pp.181-183.

佐々木智子・宮本律子 (2003) 「日本語初級クラスにおける導入方法—日本語教師養成講座の実習授業教案を分析して—」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』, 25, pp.145-152.

立部文崇・藤田裕一郎 (2015) 『日本語教師発話コーパス』, <http://www.corpus-ft.com/> 日本語文章難易度判定システム jReadability, <https://jreadability.net/>

藤田裕一郎・立部文崇 (2020) 「日本語学習者が接する授業内インプットと教室外インプットの比較」『朝日大学留学生別科紀要』 17, pp.17-22.

防菌絵里子 (2009) 「日本語学習者に対するティーチャー・トークに見られる諸特徴」『愛知教育大学平成21年度修士論文抄録』愛知教育大学

山本幸子(1994) 「日本語教育におけるティーチャー・トーク」筑波大学地域研究研究科修士論文

## 参考資料

表4 語彙レベル構成（実数値とSD）（ ）はSDを表す。

	初級前半	初級後半	中級前半	中級後半	上級前半	上級後半
初級	1011.51 (435.58)	645.65 (354.74)	341.79 (196.05)	154.40 (73.84)	12.19 (11.32)	2.65 (3.65)
中・上 級	781.00 (326.89)	516.50 (233.32)	393.58 (140.32)	199.42 (90.64)	27.77 (17.49)	1.23 (1.97)
雑談	738.74 (103.84)	672.11 (148.20)	433.58 (78.48)	278.47 (60.63)	54.16 (21.47)	7.42 (4.59)
論文	585.70 (374.94)	397.40 (236.68)	344.30 (165.62)	269.10 (178.11)	84.60 (57.36)	2.70 (2.31)

### 付記

本研究は、JSPS 科研費 JP17K02872（代表：藤田裕一郎）、及び JP19K00750（代表：鎌田修）の成果を含んでいる。

藤田（朝日大学留学生別科）、立部（徳山大学経済学部）